

西穂に今年も登れたということ

鈴岡潤一

今年も無事に降りてこられた……。それが最近数年の実感である。体力の衰えは年を経るごとにはっきりしてきている。山荘到着までの所要時間が年々長くなっている。

なぜ、登るのだろうか。

最初に登ったのは、1980年である。恥ずかしい話だが、そのとき私は13回忌のつもりで登ったのである。実際は一年ずれている。おぼろげで、もう少し前の11回忌ころだったように記憶していたが、先日、小林俊樹先生に確かめると、そのとき先生に同行した現役生（34回）が一人居て、年次として間違いなさそうである。そのほかには当時の深志高校教員である百瀬康雄先生（23回）と、小林先生の山仲間でもある岡沢祐吉さん（4回）も一緒だった。誘われるままに翌日は西穂を越えて天狗のコルから岳沢を下り、今はなくなってしまった岳沢小屋に泊っている。奇遇はあって、その数年後に裏銀座を生徒と槍ヶ岳を目指して歩いているときに、逆コースを雲の平に向かう岡沢さんとすれ違っている。

その間は諏訪時代にもう一度登り、このときには若き斉藤金司先生（11回）と出会っている。松本に異動になってからは、この14年毎年登っていることになる。

独標とは私にとってなんだろうか。

約30年前に再訪した独標では、無性に涙が流れて、声が出ず、「祝記念祭歌」はうまく歌えなかった。自分が倒れていた独標北側の鞍部に立ち、改めて倒れた場所の幸運を思った。小口先生と岡島君の間に居てそれで済んだのは本当に奇跡的なことである、とその後にもそこに立つたびに思う。

雷撃は私の背から入り足指の爪の成長能力に損傷を与えているので、結婚後の子どもの誕生に際しても、実はひそかに「本当にまともに生まれてくれるのだろうか」と心配してもいた。だから、生まれたばかりの子どもの小さい手と華奢な指がとてもいいとおしく感じられたことを鮮明に思い出せる。無事に生まれたその長男が17歳になろうとした年次の始めに、「親父と同じ歳になったから西穂に行く」と言い出したときにはとても驚き、またうれしかった。次男もそれに続いた。こうした家族たちが居ることに、また彼らが西穂をどこかで意識していることに、そして今ここにともに生きていられることに、改めて静かな感動を覚える。

思うに、独標が私を誘うのは、そこがたぶん私の第三の誕生の地だからである。その地に立つと、亡くなった彼らの顔が浮かんでくる。一緒に汗を流した柔道部の仲間や、講座が一緒によく話した君が、やはりそこに居るのである。一応は年相応に「自分らしく生きよう」というくらいの「第二の誕生」を経た（と思っている）青春時代の会話が、——会話そのものではないが、生意気だっただろう当時の我々の会話の雰囲気、いつまでも歳を取らない彼らの顔とともに、ひょいっと浮かんでくることもある。

当時、二年生になった頃の私は、存在論的に悩んでいた。クラブ活動で体を壊し、どうしたものかと、郷友会を共有しかつ同じクラブの先輩に相談したつもりだったのだが、彼は「クラブの存在を認めるのか、認めないのか」といった。先輩のその一言がある意味でその後の私を決めたのかもしれない。私は、「そうだ。問題は存在そのもののなのだ。」な

どと短絡したのである。とりあえずは進級したものの、学ぶことそのものが思うような自信につながらず、なにができるのか、何をしたいと思えているのか、要するにお前は何者なのか、という類の煩悶が私を襲っていたのである。文学青年だった田村吉司君とは、山に登ることについて、そんな風な会話をした覚えがあるのだ。そうした煩悶を抱えて私は西穂に登ることを希望した。登りきることは、「風立ちぬ いざ生きめやも」だった。ある意味の自己確認の場所が私にとっての西穂・独標だった。

落雷の瞬間は私には記憶がない。倒れた北側の最低鞍部上を流れる冷たい雨水に背中を洗われ、着ていたビニールのポンチョに当たる電の音のなかで目覚めた。横内先生や上條君、中村君に保護されながら、独標の北側のほんの少し上がった場所に坐ってぼんやりしていた。寒さに震えながら、随分長い時間そこにいた。何を感じ、なにを考えていたのかは思い出せない。死者が出る状況に直面したことと、ともあれ私はいま生きているのだということを時間の経過とともに実感したのだらうと思う。時間の経過は、雨が上がり西の空が真っ赤に染まったことが示している。——これも記憶の改変かもしれないとあまり自信がなかったが、先日の山上で、みな「夕焼け」を口にしたので、ようやくにして、確信がもてた。

こうしたことを思い出してみると、西穂・独標とは、私にとっては、11人の彼らが今もそこにいる場所なのである。それも、当時のままの彼らがそこにいるのである。だから、時には「何やってるんだ、お前」という罵声であったり、「しっかりしろよ」という励ましであったりする。

近年、一緒に登る仲間が増えた。33回忌のときに、10人ほどが集まってからは、毎年のように顔を合わせる仲間ができた。だから、近年は山に来る意味がもうひとつ増えた。「おい、あんたも一年元気に過ごしたんだな。うれしいな。また来年も会おうよ。」もちろん、これは11人の仲間たちにもかける言葉である。

